

(4) ②様式第4号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI /12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院等	実施機関名・連携機関名 ※実施機関名、及び連携機関名（ある場合のみ）を記載してください。 茨城大学教職大学院、茨城県教育研修センター
コラボ研修プログラム	事業名： カリキュラム・マネジメント実践力育成セミナー ～茨城県教育研修センターとの連携による長期研修生対象研修～
支援事業報告書	研修等名：【NITS・茨城大学教職大学院コラボ研修】 カリキュラム・マネジメント実践力育成セミナー ～茨城県教育研修センターとの連携による長期研修生対象研修～
	開催日時：令和4年11月29日 13時30分～16時45分 開催場所：茨城県教育研修センター（茨城県笠間市平町1410） 参加人数（総数）と参加者の属性：（29人） 茨城県教育研修センター長期研修生22人、茨城大学教職大学院学校運営コース・大学院生7人

内容： ※全体発表の内容をテーブ起こしするなど、具体的に記載してください。研修等の様子は、写真を右に貼り付けてください。

本コラボ研修は、茨城県教育研修センターとの連携のもと、茨城県教育研修センターの長期研修生を対象に「カリキュラム・マネジメントの考え方と進め方」をテーマとして講義・演習を実施することを通じて、カリキュラム・マネジメントの実践力を育成することを目的とした。当日には、茨城大学教職大学院から学校運営コースの現職派遣院生も参加し、長期間、学校現場を離れて研修を行っている教員同士の相互交流ができた。

研修参加者は、茨城県教育研修センター長期研修生22名と茨城大学教職大学院学校運営コース院生7名の計29名であった。研修の内容として、新学習指導要領とカリキュラム・マネジメントの関係の基本をつかむとともに、マネジメントの視点から、カリキュラム・マネジメントで取り組むべき課題や成果について、演習を交えて探究してもらった。講義・演習は、茨城大学教職大学院学校運営コースから、加藤崇英教授、長谷川真人教授、鈴木稔教授、高野貴大助教の4名が担当した（写真1、2）。「図1」に示す通り、当日のタイムスケジュールを短時間の講義・演習を交互に行う形式にしたことで、焦点化した議論が展開できた。

茨城県教育研修センターと茨城大学教職大学院が連携して、長期研修生を対象とした研修を実施するのは本事業が初めてであり、大学と教育センターの連携の新たな在り方を模索できたと考える。これは、現在進行中の「新たな教師の学びの姿」制度改革でも言及される教職大学院の外部発信の在り方に示唆も与えうと考えられる。

成果： ※参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

研修終了後、受講アンケートを実施し、研修参加者の全29名から回答を得た。全体の満足度は肯定的な評価が100%であった（「満足している」：23名・79.3%、「まあ満足している」：6名・20.7%の回答合計）。また、「あなたにとって本講義は実践に活かすことのできる内容だったと思いますか。」という質問に対し、肯定的評価を得た（「思う」23名（79.3%）、「どちらかと言えば思う」6名（20.7%））。

また、受講アンケートの自由記述を AI テキストマイニングツールのユーザーローカルで分析したところ、ワードクラウドの結果として「図2」が得られた。このツールでは、スコアの高い単語が複数選出され、その値に応じた大きさを表示される。「図2」を見ると、「カリキュラム・マネジメント」をテーマとした研修であるため、当然この単語が大きく表示されている一方で、以下2つの点で本研修の成果を示す特徴が見られる。第一に、「グランドデザイン」という単語が比較的大きく表示されていることである。これは、本研修において、学校のグランドデザインとカリキュラム・マネジメントの対応関係が意識付けできたことを証左している。第二に、「教職大学院」という単語も比較的大きい。「教職大学院」の記載があった自由記述の子細を見ると、「教職大学院の方ともお話ができて、貴重な経験となりました。」との長期研修生からの記述が複数見られた。研修センターと教職大学院のコラボによって研修を実施することの意義が確認できた。

アイデアや工夫したこと： ※3～5つ程度の箇条書きしてください。

- ・研修センター長期研修生と教職大学院院生が交流する機会を設けたこと
- ・短時間の講義・演習を交互に行う形式にしたこと
- ・教職大学院の大学教員が講義だけでなく演習にも参画することで、大学知を提供できたこと

